

齊藤 孝

これは2019年の年頭の御挨拶の拡大版ですから重複した記述もあります。長々と書いていますが特にお読み頂くようなものではなく個人的な2018年の記録です。



今が一番幸福かもしれない。

You raise me up, so I can stand on mountains;

You raise me up, to walk on stormy seas;

あなたの励ましで、山頂に立つこともできる

あなたの力づくで、荒れすさぶ海もわたろう

「You Raise Me Up」

生きる勇気を与えてくれる素晴らしい意味です。世界中で大ヒットし、多くの国々で歌われている歌詞です。2002年にシークレット・ガーデンが発表した楽曲です。この楽曲の始まりは次のような文句です。

When I am down and, oh my soul, so weary;

When troubles come and my heart burdened be;

Then I am still and wait here in the silence,

Until you come and sit awhile with me.



落ち込んで、こんなに疲れたときや

困難にぶち当たり 心に重荷を感じたときも

ここで静かにじっと待ってよう

あなたがやって来て 傍にしばらく座ってくれるまで

地球という広大な空間

昨年も多くの海外旅行を楽しみました。カタールのドーハやエミレーツのドバイは今や巨大なハブ空港となり、世界中の国々へも飛ぶことのできる便利なゲートウェイとなりました。24時間大混雑でまるで昔の上野駅のようです。肌の色も髪の毛の色も様々、東北弁のようなそれぞれのお国訛りで叫んでいます。

そのような騒然としたハブ空港で乗り継ぎの一時を楽しむことが大好きです。彼らは出稼ぎから帰るインド人ではないか。明るく笑いながお喋りをするフィリピンの女性達はルソン島とミンダナオ島から来ました。これからペトラ遺跡にあるホテルで働くそうです。一生懸命に働いて母国の家族に送金するのでしょうか。流ちょうな英語を喋るフィリピン女性は世界中の働きものです。



イスラエルの若者は頭にキツパと呼ぶ小さな帽子を付けていました。「シャローム」と呼びかけると嬉しそうに微笑んでくれました。私が3回もイスラエルに行きましたという、なぜそんなに驚きました。北はヘロモン山、ガリラヤ湖、アレンビー橋、死海とマサダの砦跡、エルサレム、紅海のハイラートそしてモーゼが「十戒を与えられた」シナイ山までにも行きました。彼は非常に驚いて私に対して、貴方はユダヤ人ですかと質問してきます。今度は冗談に「サッラーム」とアラビア語で答えて、イスラム教の祈りを真似て次のように答えました。二人で大笑いしました。

神は偉大なり(アッラーフ・アクバル)

唯一の神の他に神なし

ムハンマドは神の使徒なり

ユダヤ人もアラブ人も同じセム人種でイブラヒムの子供でしたから言葉も似ています。

話の頃合いをみて、その若者に尋ねてみました。マイモニデスというユダヤ人の哲学者を知っていますか。当たり前です。日本人の貴方が何故知っているのか、不思議な顔になりました。マイモニデスの切手が発行され、肖像画はイスラエル紙幣にも採用されました。

マイモニデスの足跡

人間の完成は理性の完成であり、哲学こそが人間を神に導く。これはマイモニデスの言葉です。私にとり耳の痛い話です。未だに食欲、性欲、欲望に満ちた後期高齢者。このまま自分が認知症にでもなり性犯罪者になったらどうなるのだろう。



2018年前半の海外はマイモニデスの足跡を辿るような旅でした。スペイン、モロッコ、カナリア諸島、キプロスとマルタなど回りました。彼はスペインのユダヤ教ラビであり、哲学者でした。医学・神学にも精通していたアリストテレス主義者でもありました。

「モーゼの前にモーゼなく、モーゼの後にモーゼなし」

モーセ・マイモニデスは暗黒の中世をルネサンスへと導いたヒューマニストでした。

死後は神の意思『十戒』をシナイ山で受け取ったモーセと同じ道を辿り、マイモニデスの遺体はガリラヤ湖畔のティベ

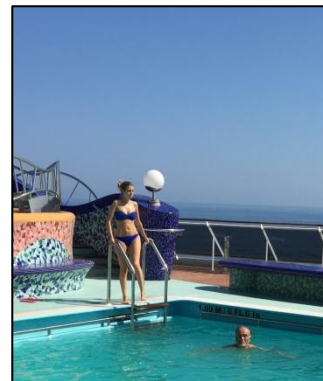
リアに葬られました。

マイモニデスは 13 世紀にアンダルシアのコルドバで生まれました。当時のアンダルシアはイスラム・ウンマイア朝に支配されたスペインの一部でした。追放後は多くのユダヤ人のようにモロッコ、チュニジアなどマグレブを彷徨い、エジプトに行きました。途中、パレスチナではエルサレムで修行し、十字軍との戦いで勝利した英雄サラディンに仕えました。

地図にない国々 北キプロス共和国

1月に訪れたキプロス島は中世にベニスの植民地であり、オスマントルコの支配を受けた後、英国の植民地になりました。1960年に独立し、その独立闘争でマカリオス大主教が大統領に就任。ところが人口の8割を占めるギリシャ系住民を中心にギリシャとの合併を求める声が根強く、これを背景に1974年にギリシャ合併推進派によるクーデターが発生、これに対しトルコはトルコ系住民の保護を目的に派兵しキプロス島北部を占領しました。これが北キプロス共和国の誕生です。北キプロス共和国は独立国として国際的に承認されていません。首都ニコシアに緩衝地帯（グリーンライン）がひかれ、北キプロスと南キプロスに分断されています。日本から見ると幻の国です。

これに似た地図にない国は、東欧モルドバ共和国の中にあるドニエステル共和国です。国際的にはモルドバ共和国の一部と見なされています。しかし事実上の独立状態です。お金が面白く硬貨はプラスチックで玩具のようなコインでした。



映画『マルタの鷹』

『マルタの鷹』は、ダシール・ハメットの探偵小説で1941年に映画化されました。主演はハンフリー・ボガードです。私立探偵スペード(ハンフリー・ボガード)の探し求めるのは、マルタ騎士団にゆかりの『マルタの鷹』です。この映画でマルタ騎士団の存在とマルタ島が一躍有名になりました。マルタは1522年にロードス島を追われた聖ヨハネ騎士団(後のマルタ騎士団)の所領となりました。1974年にイギリスから独立してマルタ共和国となりました。私は小型犬マルチーズの発祥の地であり、マルチーズの名はマルタに由来することを初めて知りました。

カール・マルクスのトリーア

2月の厳冬期、ベネルックス諸国を訪れるためドイツのデュッセルドルフに入り、コブレンツからライン河下りをしてボンに行きました。ケルンでカーニバルを見物した後、アーヘンとトリーアに行きました。



共産主義の生みの親ともいえるカール・マルクスが青年期まで暮らした古都トリーアを観光しました。プロイセン生まれの彼は12歳の時にトリーアのギムナジウムに入学しました。青年マルクスはユダヤ人詩人ハイリッヒ・ハイネに熱中し将来は詩人になりたいと夢見たそうです。2018年のマルクス生誕200周年でも

あり、中国政府から寄贈されたマルクス像を見物する中国人の「レッドツーリズム」(紅色旅遊)の旅行者で賑やかでした。



フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』

ルクセンブルグからオランダに入りマウリッツハウス王立美術館でヨハネス・フェルメールの代表作『真珠の耳飾りの少女』を鑑賞しました。その神秘的な魅力から「オランダのモナ・リザ」と称賛されるそうです。その少女は、体は横を向きながら、肩越しに顔をこちらに向けようとしています。少女が頭に巻いているターバンの鮮やかな青が美しい。

ラピスラズリという宝石から作った非常に高価な絵の具です。口元は少し開き加減で、唇の濡れた感じです。映画化された物語では少女役をスカーレット・ヨハンセンが演じていました。唇が官能的なヨハンセンは適役でした。



レンブラントの『夜警』

アムステルダム国立美術館に展示されレンブラントの『夜警』を鑑賞するのは3度目ですが、日本の美術館と違い巨



大な絵画の前まで行きカメラで撮影できることは嬉しいです。何回みても迫力ある人物描写です。市民自警団が出動する瞬間を描いています。

黒い服に隊長の印である赤い飾り帯を斜めにかけて隊長とその部下達が動き出し、銃に火薬を詰める隊員や鼓手がドラムを構え、後ろで旗手が隊旗を掲げています。

17世紀では写真もなかったのですからこのような写真的絵画だったのです。

ルーベンスの『キリスト昇架』

ベルギーのアントワープ(アントウェルペン)で聖母マリア大聖堂にあるルーベンスの『キリスト昇架』を鑑賞しました。

児童文学『フランダースの犬』で有名な主人公ネロが見たかった絵画です。ネロと愛犬パトラッシュの悲しい物語は日



本であまりにも人気があったので記念碑を日本人観光客のために建てたそうです。

カナリア諸島とマデイラ諸島

早春3月はカナリア諸島クルーズに出かけました。コロンブスやマジセラなども住んだこともある島々です。カナリア諸島はスペイン領で、マデイラ島はポルトガル領です。

アフリカ大陸の北西沿岸に近い大西洋上にあり大陸で最も近いモロッコ

からの距離は 100km~500km もあります。カナリア諸島のテネリフェ島にはスペイン最高峰テイデオ山(海拔 3718m)があります。本土のピレネーやシエラネバタの山々よりも高いこととなります。クルーズ船はバルセロナを出港し地中海を進み、ジブラルタル海峡から大西洋に入りました。最初の寄港地はモロッコのカサブランカ。そしてカナリア諸島を巡り、マデイラ島に到着しました。コロンブスの屋敷でサンタマリア号の実物大の模型に入り込み 15 世紀の大航海時代にいるような気分でした。

マッターホルンとアオスタ渓谷

6月にはスイスを観光しました。最初にジュネーブからシャモニーに入り、イタリアのアオスタに行きました。モンブランやマッターホルンと言えばフランスやスイスの登山スポットのイメージが強いのですが、実は北イタリアも隣接しています。

これらの山岳に最も近いヴァッレ・ダオスタ州の首都は、アオスタです。アオスタ渓谷から世界に名立たるアルプスの名峰モンブラン、マッターホルンなどの雄姿をイタリア側から眺めることができました。イタリア語ではそれぞれモンテブランコとチェルヴィーノと呼びます。残念ながら6月初旬の悪天候でチェルヴィーノの姿は遠望できませんでした。

結局、スイス側に戻りツェルマットから登山電車で登りゴルナーグラートまで行きました。そこからはゴルナー氷河とフィンデル氷河に挟まれたモンテ・ローザ、リスカム、マッターホルン、ドム、ヴァイスホルンなど 4,000m 級の高山を眺めることができました。



ウラジオストックとシベリア沿海州

メリケン波止場という名前で親しまれた横浜港の大栈橋。外国に憧れた中学生の頃です。

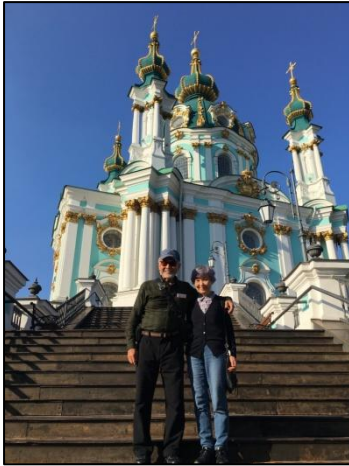


新聞には出船入船というニュースが毎日載っていました。どこの国の船だろうか。名前から遠いアルゼンチンから来た船ではないか。親戚を見送ったブレジデント・ウィルソン号の豪華な姿。船に乗ってメリケン波止場から洋行することが夢でした。その夢が叶いました。酷暑の8月に横浜港から洋行することができました。残念なことはクルーズ船がおりにも巨大で大栈橋に横付けできませんでした。正確には横浜ベイブリッジの下をくぐれないということです。

クルーズ船は、『MSC スプレンドイダ』と呼び 18 階建て全長 350 メートルもあり、乗客数定員 4,363 人、乗員も 1,370 人もいます。

まるで巨大建物のホテルです。そこで横浜港の大黒埠頭から出港することになりました。写真は船中で会ったスコットランド夫婦とウラジオストックの戦勝記念の潜水艦です。





目的地はシベリア沿海州の港町のウラジオストックです。ロシアのサンフランシスコと呼ぶとロシア人は大変喜びます。途中、太平洋を北上し北海道の室蘭に寄港。青森のねぶた祭を見物した後、日本海を北上してウラジオストックに入港しました。まるでヨーロッパの港町の風情でした。

ウラジオストックのウクライナ人の祖先の多くは、19世末にオデッサから移民船でアメリカのサンフランシスコに行けるものと信じていたのが黒海、地中海、大西洋を進みアフリカの喜望峰を回りインド洋、太平洋、日本海を進みサンフランシスコとは全く反対方向のウラジオストックに運ばれたというのです。騙されたのですね。ただし一部の人は無事にアメリカやカナダに到着することができました。

ウラジオストックはロシア極東の大都会で待ちゆく人々も金髪碧眼も多くヨーロッパの雰囲気があります。町を走る自動車は右ハンドルの日本製中古車ばかりで左側通行の市道に不具合なのはと心配しました。帰りは大型台風が東北太平洋側に接近、それを避けるために急きょコースを変更して日本海を横断して南下、竹島の横を進み対馬海峡から五島列島、屋久島を経て四国沖、紀伊半島から伊豆半島を跳め横浜に戻ってきました。日本列島を一周したクルーズを楽しみました。

チュニジア陸軍により救助される

アフリカ象に乗り込み雪のアルプスを越えてイタリア半島に遠征したという伝説があるハンニバル将軍。彼はローマとのポエニ戦争を戦ったカルタゴの英雄でした。9月にカルタゴの遺跡あるチュニジアを巡りました。カルタゴ滅亡後はローマの支配で繁栄した土地ですから数多くのローマ帝国の遺跡が残っています。ドゥッガ遺跡、エルジェムの円形闘技場。ローマ市に残るコロッセオに次ぐ大きなものです。この北アフリカの地で剣闘士と猛獣との闘技させたのです。北方ブリタニア、ゲルマニアからガリア、東方アナトリア、シリアそして北アフリカまで、何方に駐屯しようともローマ軍人は円形闘技場、大浴場など標準化された建物で楽しめたのです。ローマ人の娯楽は豪快でした。



チュニジアは北アフリカに位置しますから南部にはサハラ砂漠が広がります。雨量は極端に少なく乾燥しています。ところが南部に位置するエルジェム円形闘技場を観光した帰り道です。雲行きが怪しくなりスースの近くで雨が降り出しました。チュニジア人にとり恵みの雨です。なかなか雨は止みません。激しくなり下水が不備な道路が雨水で溢れました。やがて道路が川のように大雨になりました。小さな川の護岸は決壊して付近の道路に水浸しです。大型観光バスの車体底部、トランクルームが水没する状態になりました。そしてエンジンの調子もおかしくなりストップしました。バスの車内ランプも消えて宵闇の中で不安な時間を過ごすことになりました。バスの外は膝上までくる水準です。暗闇で道がどこなのかわかりません。救援をともめた結果、なんとチュニジア陸軍の大型トラックが来てくれました。強靱

なチュニジア陸軍の若者に手が差し伸べられ大型トラックに乗り込むことができました。近くの体育館まで連れていかれた時、救援の小型バスがチュニスから駆けつけてくれ全員無事に真夜中のホテルに到着できました。大変危険な思いをしましたが、忘れがたい思い出になりました。北アフリカでも洪水に注意。

黄金のウクライナ



ウクライナといえば今クリミア半島の領有権などでロシアと険悪な関係で危険な国と勘違いされています。10月に紅葉で美しい黄金のウクライナを観光しました。

私のウクライナに対する憧れは、数々あります。最初にウクライナを訪れたのは2003年でした。お隣のスロバキアから小型バンに乗って入国しました。大学の調査隊の一員としてです。カルパチア山脈の麓にあるウジホトロド、そ



して西ウクライナの中心都市リビフに行きました。西ウクライナはスロバキアやポーランドと民族的にも言語も文化も変わりません。宗教はカトリックと正教、そして両者を組み合わせたユニエイト。これが昔の調査の対象となった主題です。学術的には東方典礼カトリック教会ユニエイトと呼びます。複雑なウクライナの歴史そのものを象徴するユニエイトなのです。



今度はウクライナの中央に位置する首都キエフ、黒海の港町オデッサそして鉄道の旅でリビフを再訪しました。ウクライナの名前からまず思い浮かぶのはキエフ・ルーシンと呼ぶ正教の伝来。隊長プーリバで知られるコサック。戦艦ポチョムキンの反乱とオデッサの階段。これはアレクサンドロ・ネフスキーやイワン雷帝を監督したエーゼンシュタインの名画です。何回見直してもあの階段で起こった虐殺シーンで見せてくれる混乱する人々の表情、まるで歌舞伎の演技を見ているようです。

クリミア半島にあるバクチサライというタータール人の都遺跡。2次大戦の終戦処理を決めたヤルタ会談。軍看護師ナイチンゲールが活躍したクリミア戦争のセバスポリ。ソ連の

失政で約100万人にも餓死したという大飢饉。カルパチア山中で懸命に戦い抜いた反ソバルチザンの話。こんな興奮をウクライナで体験したいと思いました。

マンデラとケープタウン

インドの無抵抗主義を貫き独立を勝ち取ったガンジーに匹敵するような偉大な闘志である反アパルトヘイト運動のネルソン・マンデラ。

彼が10数年も収監されていた強制収容所があるロベン島を望む南アフリカのケープタウンに行きました。晩秋11月

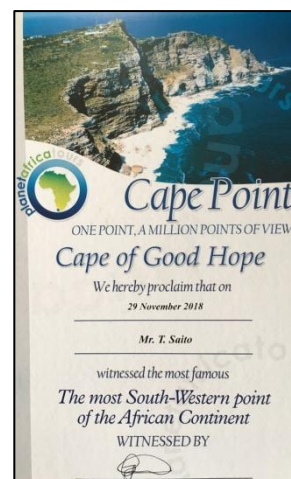


の日本を出発して香港経由で18時間のフライトでした。テーブルマウンテンでは南極から吹き付ける寒い強風、これが南風なのが北半球の常識と異なります。ケープタウンでは北風が暖かで窓も北向きが最適なのです。ケープタウンはサンフランシスコ湾に似ていてそこに浮かぶロベント島は刑務所のアルカトラス島にそっくりです。

マンデラが収監されて過ごした長い年月、そこで共に過ごした貧しいアフリカーンズの白人看守との交流を描いた『マンデラの名もなき看守』を思い出しました。

アフリカーンズはボーア人とも呼び17世紀頃にオランダやドイツから渡った子孫です。

後から来た英国系の人々と違い独立心の強い移民でした。英国と独立のために戦ったボーア戦争は有名で、若き日のウィンストン・チャーチルも従軍したとも言われています。



ユグノーのケープワイン

南アフリカのワインは日本でも有名です。特にリーズナブルなものは KVV というワインです。現地のワイナリーで飲む本物のケープワインの味は素晴らしい。本場フランスワインの香りと味に引けを取らないと思いました。赤ワインの



葡萄は「ピノタージュ (Pinotage)」と呼ぶ品種。ピノ・ノワールとサンソー (エルミタージュ) の交配種です。ピノ・ノワールはブルゴーニュの品種として有名ですが、暑さや病虫害に弱く、ブルゴーニュ以外の地方では生育が難しい。そこでフランスのローヌ地方で作られるサンソーと呼ぶエルミタージュと交配させて生まれたものがピノ・ノワールとエルミタージュ (Hermitage) の半分ずつをとって、ピノタージュと名付けられました。

ケープワインの育成にはフランス人の努力がありました。そのフランス人にも歴史を感じました。『ナントの勅令』の廃止によってフランスを追われたユグノーたちもおり、彼らはケープタウン近郊に入植してワイン作りを始めました。

『ナントの勅令』は、1598年にフランス王アンリ4世がナントで発布した勅令のことです。ユグノーなどのプロテスタント信徒に対してカトリック信徒とほぼ同じ権利を与え、ヨーロッパで初めて個人の信仰の自由を認めた勅令です。その後1685年、「太陽王」ルイ14世はナントの勅令を廃止し、カトリック中心の権威主義的な国家へと逆戻りさせました。

これによって、ユグノーの多くはネーデルラントやドイツなどの国外へ逃れました。ネーデルラントに亡命した人々がケープに渡ったのです。そしてアフリカーンズとなりケープワインを育てたのです。壮大な歴史に感激してピノタージュを飲みました。

五星赤旗の喜望峰

素晴らしい日本語訳ですね。Cape of Good Hope を訳したものが、直訳すると「希望岬」となります。中国語では「好望角」と訳されています。誰が「喜望」と変えたのか分からないそうです。

喜望峰はケープタウンから50km南へ延びたケープ半島の先端にあります。喜望峰がアフリカ大陸の最南端といわれますが、150km離れたアガラス岬が最南端です。



ヴァスコ・ダ・ガマが 1498 年に喜望峰を回りのインドに到達しました。大西洋とインド洋が出会う岬です。中国人の観光客で大賑わいでした。記念のプレートの前でシャンペンを飲みながら大きな五星赤旗を広げ歓声を上げていました。南アフリカも『一带一路』と呼ぶ中国の巨大経済圏構想に組み込まれるような勢いを感じました。

薔薇のオープンガーデン

5月には小さな庭に可憐に咲き誇る薔薇を相手に多くの友人に会うことができました。薔薇は愛情ある手入れ次第で、さらに多くの人に見てもらっただけで見事に咲いてくれます。台風の南風で塩害を被り、葉っぱ抹茶色になりましたが秋には生き生きと蘇りました。年末の12月まで名残の薔薇を楽しむことができました。友人の画家フジコさんにさし上げたところ薔薇園や花屋の薔薇とは違うと喜ばれました。薔薇の花々が蕾のものから小さいもの大きなものまで様々あり、葉が多くついている。



特に茎の緑の色が強くて生き生きしている。自然な生きを感じるというお褒めの言葉でした。

薔薇の会は多くのおみなさまにお集り頂きました。栄子の幼稚園から高校まで同窓であった貴婦人の集い。大学のクラスで共に眠りこけた学友。教壇から居眠りを誘う私の講義に耐えてくれた卒業生。薔薇より団子、もともと花などに美意識を理解できない山友達。みなさんと深酒しました。



オープンガーデンは7月に松井田アルスロンガ農園でも行いました。夕間の中、美しいシルエットを描く名峰「妙義山」を見ながら始めました。まず一同が可憐に咲く夕管（ゆうすげ）を囲み、お仲間の一人が解説される「かの町に始まる」皇后陛下の御歌について神妙に拝聴しました。

北アルプス西穂高岳に登る

7月に何回ともなく山歩きた思い出深い北アルプスをワンデリングしました。毎年山の友人たちと夏合宿を行っていますが、昨年は平湯温泉を中心に上高地や西穂高岳に集いました。この機会に山仲間と歌うのは山の歌、そして「シャナンドー」などカントリーソングです。新たに「You Raise Me Up」をカラオケで歌ってみました。山の仲間とは9年前に歩いたエベレスト・トレッキングを懐かしみ「ヒマラヤ戦友会」と称して毎年11月に集まっています。



作並と山寺

10月に仙台の友人ご夫妻の招待で宮城の作並に行きました。作並温泉で知られた山里ですが今では仙台郊外の別荘地



という雰囲気でした。陸奥の紅葉が最盛期で実に美しい日本の晩秋を楽しむことができました。友人の素敵な別荘で歓待されて、翌日は紅葉を見ながら国道48号線を登り山形天童方面にドライブしました。途中、立石寺にやりました。別名は山寺と呼ばれます。

「閑さや岩にしみ入る蟬の声」

これは松尾芭蕉が詠んだ俳句で、彼が愛した名刹が山寺です。日本の紅葉は細やかで彩画のように清楚です。

アルスロンガ農園とワイン

友人たちと育てる葡萄で毎年ワインを作っています。名前はアルスロンガ・ワインと呼びます。昨年酷暑の夏や大型台風の襲来もありましたが豊作でした。

I am strong, when I am on your shoulders;

You raise me up... to more than I can be.

あなたの肩にすがって、私は強くなる

あなたの励まして・・・



2019年は、「You Raise Me Up」を歌いながら国内外を飛び回りたいと思います。

みなさまのご健康とご活躍を祈ります。

2019年1月1日 齊藤 孝